幼児の主体的な表現を支える多様なリズム

The Various Rhythm with which Infant's Independent Expression is Supported

高　奈奈

要旨

本稿では、幼児が感じたことを主体的に表現するためには、保育者がどのように子どもに関わり、支援する必要があるのかについて述べている。幼児の音楽表現活動におけるリズムの特徴を明らかにし、保育士・幼稚園教諭に必要なリズムの種類についてまとめた。

キーワード：幼児の音楽表現　リズム

はじめに

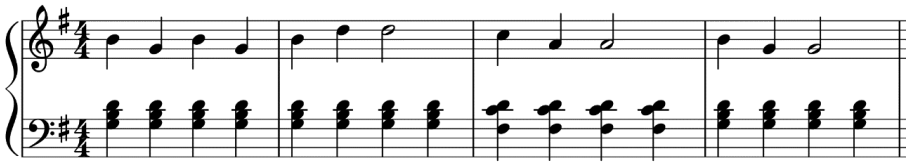
幼稚園教育要領（平成29年３月告示）の領域「表現」第３節内容の取り扱いにおいて、「幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること」とある。幼児期は感性が豊かで、美しい物を見たり美しい音楽を聴いたりした時、自然と体が動き出し、素直に表現することができる。一人ひとりの感じ方は様々で、保育者は幼児の素朴で多様な表現を受け止め、それらを引き出し、音楽表現活動として形づくる必要がある。感動を他者と共有することで、深く記憶に刻まれ、その後の主体的な表現活動を促すことになる。また、感じたことや思いを「表現する楽しみ」を感じることで、他者と関わる力の育成にも繋がる。

幼児の様々な表現活動を受容し、引き出すためには、保育者が様々な音楽表現の技法を身につける必要がある。特に、多様なリズムの種類を習得することで、幼児の自由な身体表現や音楽表現に応じて、活動を支えることができるようになる。

１．幼児の音楽表現における様々なリズムの特徴

（１）マーチ

譜例１

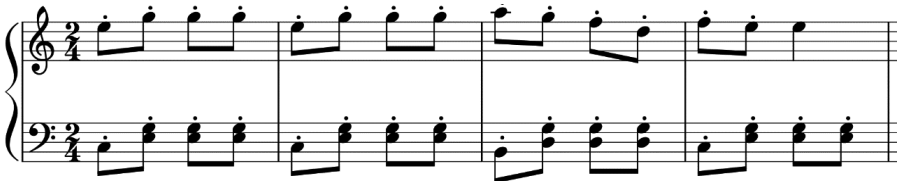


譜例１のように四分音符が連続し、そのリズムに合わせて子供たちが行進する。劇遊びでの登場シーンや律動で大きな動物になりきって「ドシンドシン」と歩く動きを引き出すことができる。

神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科　助教

（2）**かけあし**

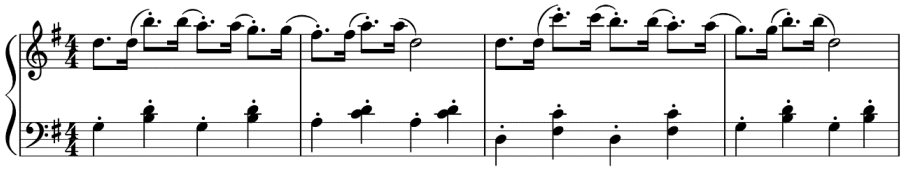
譜例 2



譜例 2 のように四分音符が連続する音形を全体的に軽く演奏することで、子供たちが楽しく明るくかけあしできる。劇遊びでは、追いかけられるシーンや急いでいる様子を表現することができる。また、鳥やリスなど小さな動物が動く様子をイメージすることができる。

（3）**スキップ**

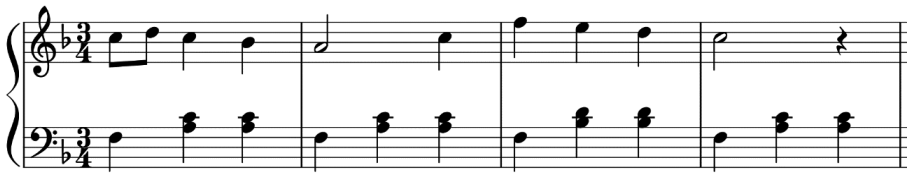
譜例 3



譜例 3 のように付点四分音符と八分音符の組み合わせが連続すると、スキップのリズムとなる。身体表現でスキップを行うことにより、リズム感と体のバランス感覚の育成につながる。劇遊びでは、何か楽しいことが起こりそうな雰囲気を出すことができ、より子供のイメージが膨らむ。

（4）**ワルツ**

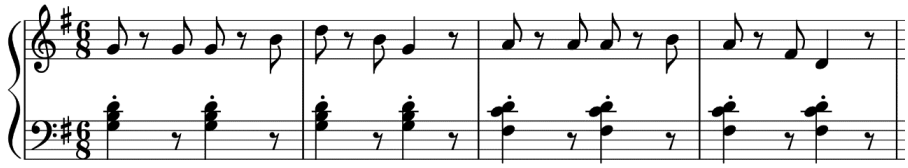
譜例 4



譜例 4 のようにワルツは四分の三拍子が特徴の旋回舞曲である。身体表現で音楽に合わせて踊り、他者と楽しみながら表現することができる。三拍子の柔らかな曲想から、劇遊びでは海の中やお城など様々なシーンのイメージに合わせて表現することが考えられる。

（5）**ギャロップ**

譜例 5



ギャロップは、馬の駆け方を模したリズムで、譜例 5 のように八分の六拍子である。馬は子供にとってイメージが膨らみやすい動物であり、鳴き声も模倣しながら馬になりきって身体表現することができる。

これらのリズムの特徴から、子供の音楽表現を支える音楽的な特徴は以下の通りであると考える。

① 拍子について

四分の四拍子、四分の三拍子、四分の二拍子、八分の六拍子が中心となる。

② 調性について

ハ長調、ヘ長調、ト長調、二長調、変ロ長調が中心である。

③ 音符の長さについて

二分音符、付点四分音符、四分音符、付点八分音符、八分音符、十六分音符

保育者はこれらの特徴を理解し、組み合わせて、幼児の表現活動を引き出し、支える必要がある。

2．初見視奏から学生が苦手なリズムと音楽の特徴を探る

前項では、幼児の音楽表現を支えるリズムの特徴について述べたが、本学の学生がそれらのどの部分に難しさを感じているのかを探り、多様なリズム習得に向けた学習内容を考えたい。「音楽Ⅲ」受講生に対し初見視奏の試験を実施し、その結果からより有効的な学習の方法を探究したいと考える。

（1）実施内容

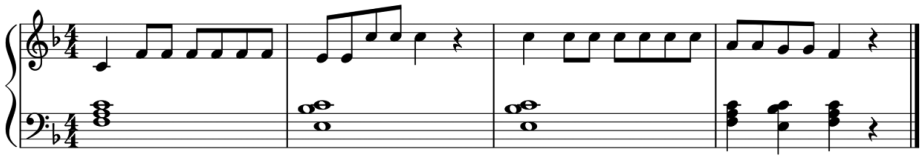
実施日：2017年７月21日

対象者：音楽Ⅲ受講生（大半が本学の２年次生）

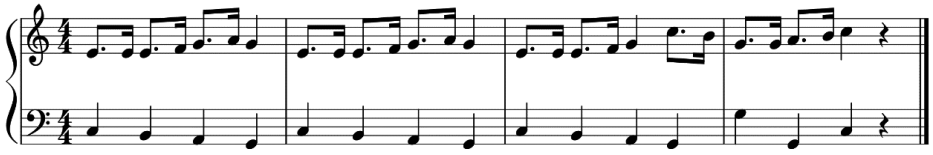
採点者：高奈奈、本学非常勤講師（沢田真智子、角南優子、金澤恵子、城市純子
塩田藍、高橋智子、前北恵美、貞清直美、窪田雪深、長岡紫）

概　要：演奏の前に30秒間楽譜を見た後、両手で演奏し、得点は５点満点で採点した。
譜例６～８を事前に例題として提示した。問題は、受講生のグレードに応じてＡ（易しい）～Ｅ（難しい）の各５曲作成し、個人レッスンの担当教員ではない教員が出題する。問題は、筆者が作曲したものである。

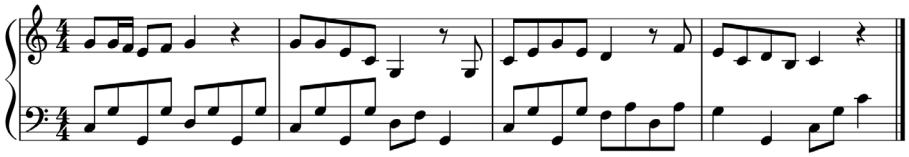
譜例６



譜例７



譜例８



（２）得点の結果

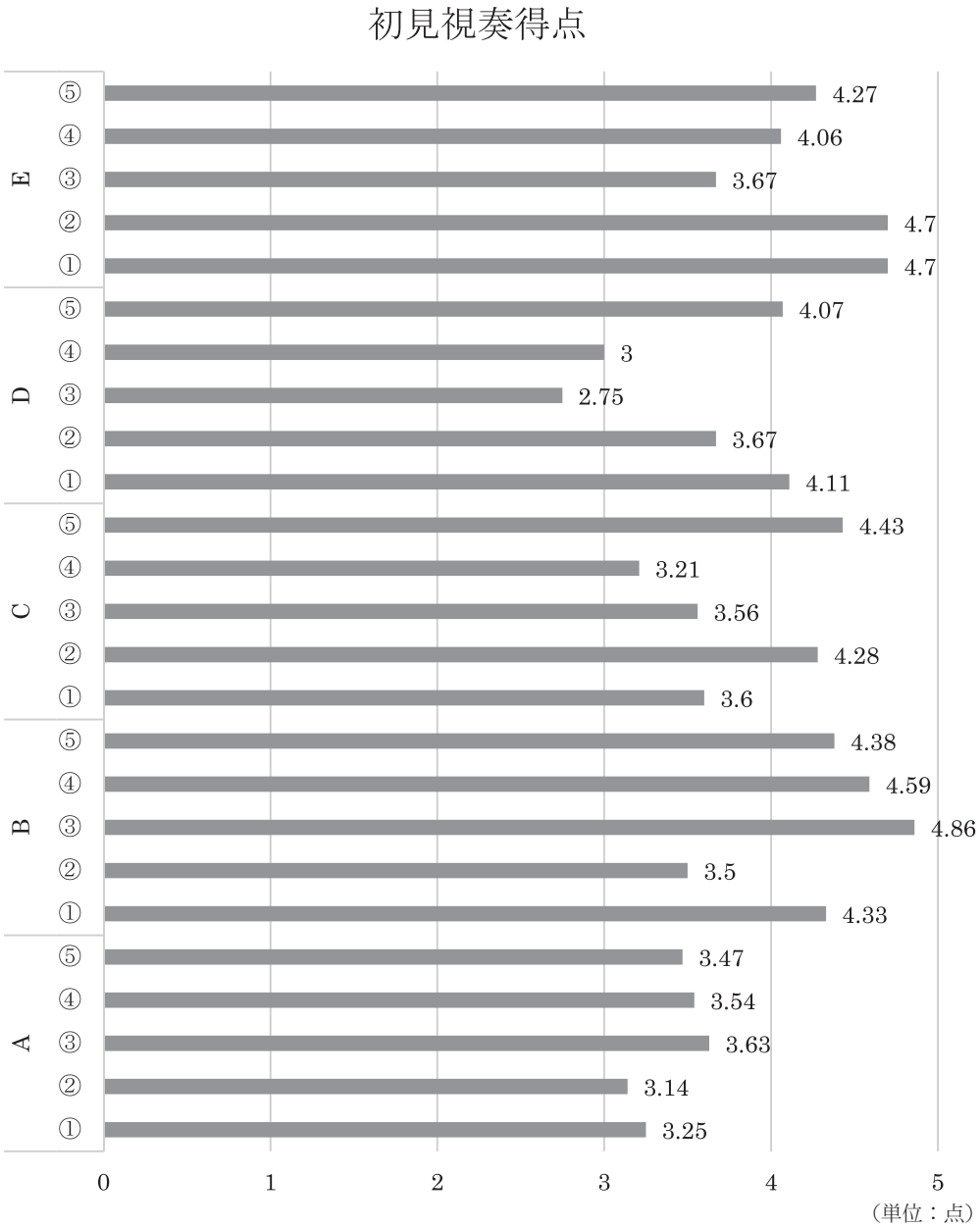


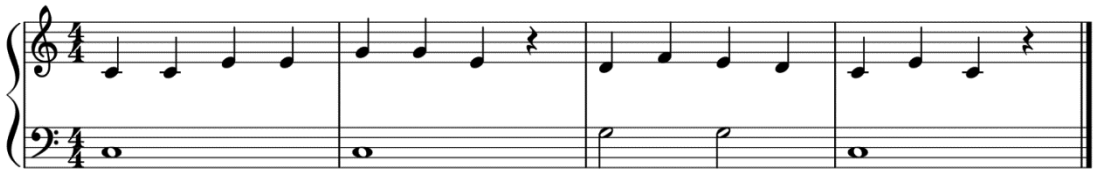
図１

各グレードの平均点は、Ａ：3.41、Ｂ：4.33、Ｃ：3.82、Ｄ：3.52、Ｅ：4.28で、全体の平均点は3.87であった。グレードＢの問題を出題された受講生が一番高い得点を得ており、グレードＡの問題を出題された受講生が一番低い得点であった。グレードＡの問題を出題された受講生は、大学入学後よりピアノの学習を始めた者が多く、読譜力の低さとピアノに対する苦手意識から初見で演奏することは難しいと考察する。ピアノ学習の経験者が多いグレードＣ～Ｅの問題を出題された受講生は、なぜグレードＢの問題の出題された受講生より平均点が低くなったのか、各グレードの問題の特徴と得点を照らし合わせて考えたい。

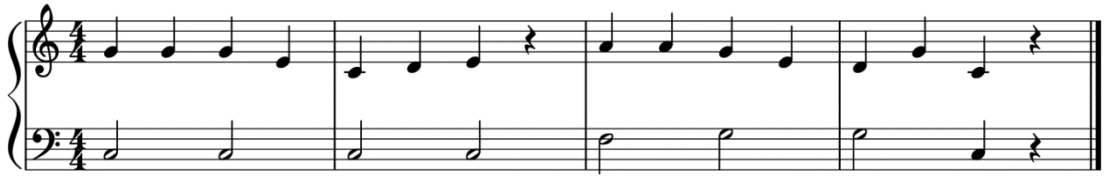
（3）各グレードの考察

1．グレードA

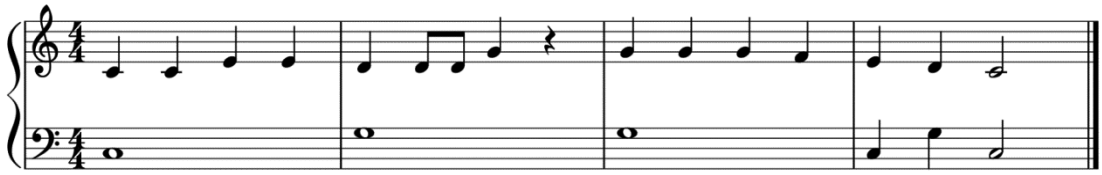
①



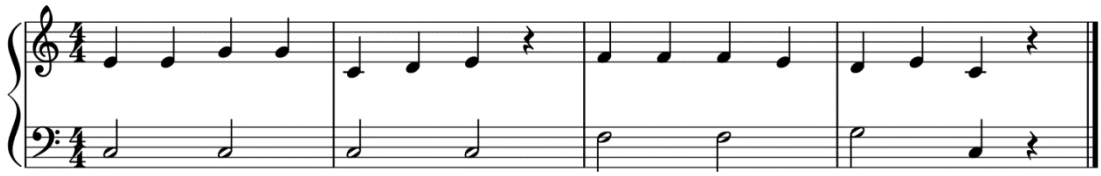
②



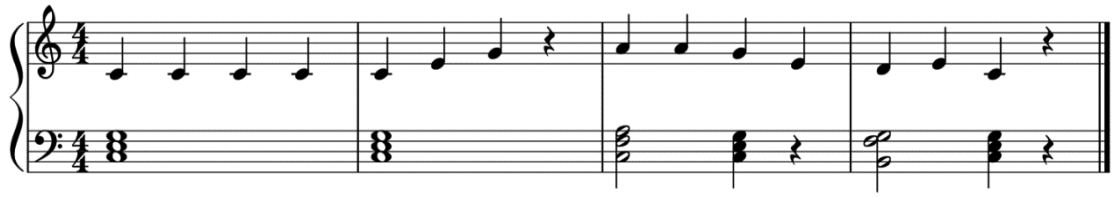
③



④



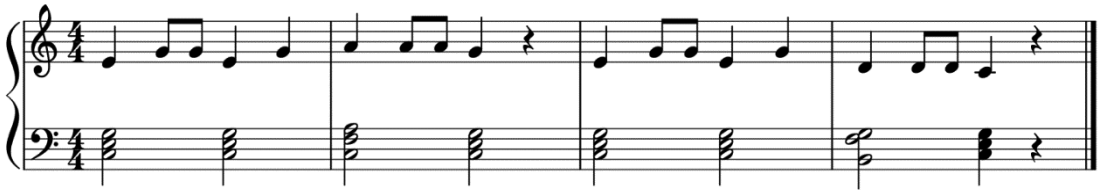
⑤



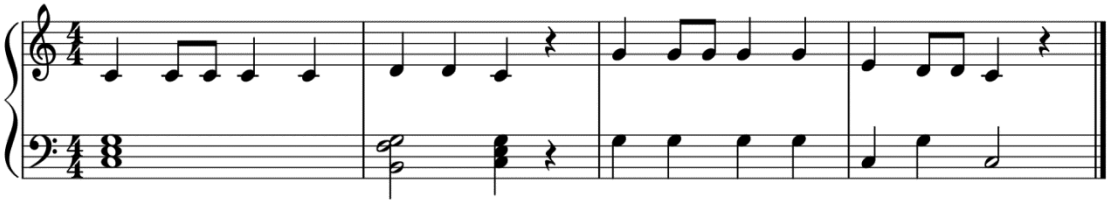
グレードAの問題は、全音符・二分音符・四分音符・八分音符で構成した。A②が3.14点とグレードAの中で一番得点が低いが、これは右手の旋律の指使いに難しさがあったと考えられる。2小節目から3小節目にかけて手のポジションを移動する必要があり、その後の4小節目にレからソの跳躍があるため、初心者にとって難しい運指となる。A②とA⑤の3小節目は同じ旋律であるが、A⑤の4小節目はレミドと鍵盤の位置が近いため、比較的スムーズに演奏できる。A③は、グレードAの中で唯一八分音符を使用したが、両手共に手のポジションを移動せずに演奏できるため、一番得点が高いと考えられる。A⑤以外は左手が単旋律である。また全ての曲がハ長調であるため、音の高さも理解しやすい。ハ長調でしっかりと音の高低や様々なリズムの種類の感覚をつかみ、様々な調の演奏ができるよう取り組む必要がある。

2．グレードB

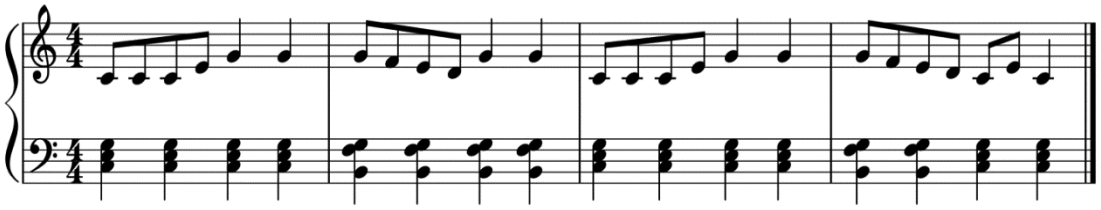
①



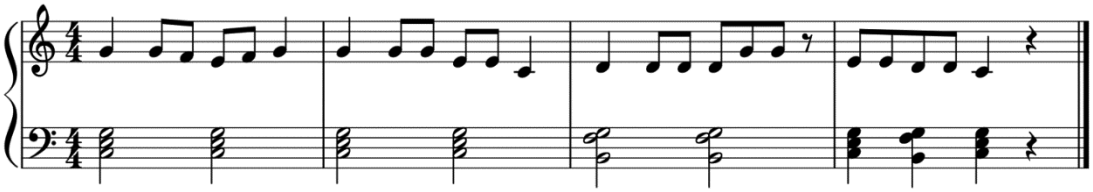
②



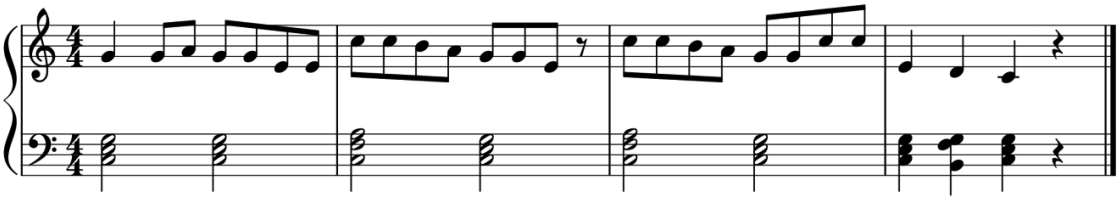
③



④

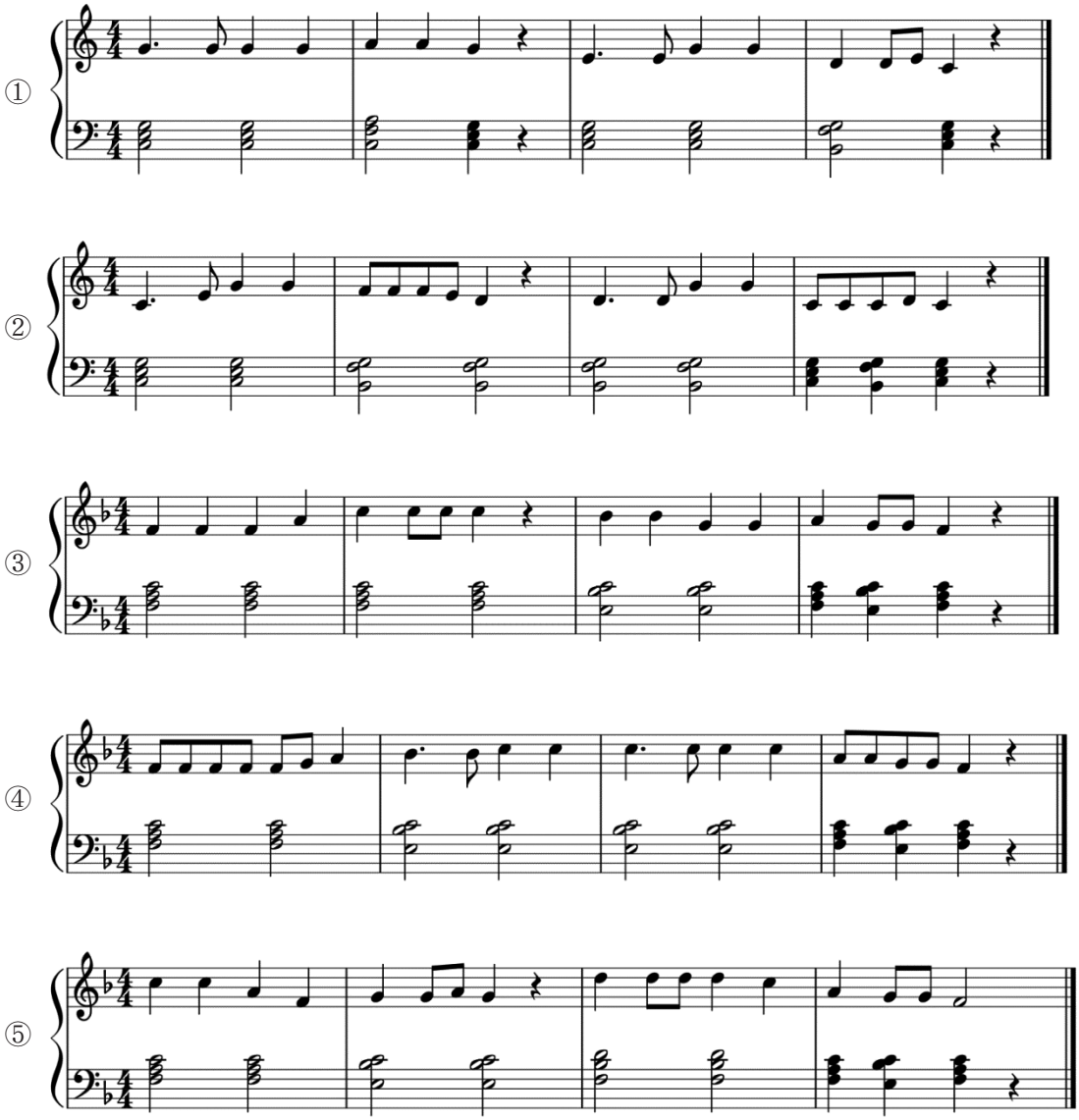


⑤



グレードBの問題の一番の特徴は、左手伴奏部をハ長調のⅠ、Ⅳ、V_7で構成していることである。B③は全体を通じて一番高い得点であったが、その一番の理由としては、左手の伴奏部が四分音符の連続であり、一定のリズムが刻まれて音楽の縦の流れが感じられやすいことであると考える。また、右手の旋律についても手のポジションを移動することなく演奏できるため、初見でも演奏が容易である。B④と⑤について、左手は二分音符の連続であるが、B③と同様に一定のリズムが刻まれているため、高得点に繋がったと考察する。B①と②は一見容易に見えるが、伴奏形が変化するため、一瞬で読譜するのが難しいと推測する。四分音符の連続は、マーチの表現技術につながるため、様々な調のⅠ、Ⅳ、V_7の和音を打鍵する手の形を繰り返し練習する必要がある。

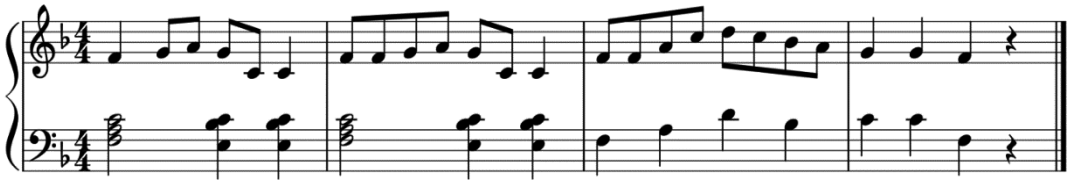
3．グレードＣ



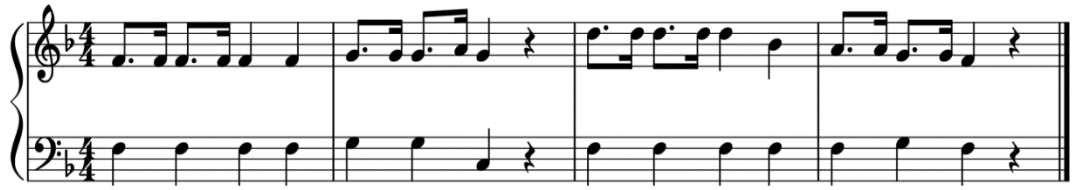
グレードＣは、ほとんどの問題においてピアノ初心者のグレードＡの次に得点が低かった。グレードＡ・Ｂとの大きな違いは、２つある。まずひとつ目は、Ｃ③・④・⑤の調性がヘ長調であること。調号が付くことにより、ピアノの鍵盤の位置の認識や音の高低の認知、黒鍵を打鍵することなど、多様な演奏技術が必要となる。２つ目は、付点四分音符と八分音符を組み合わせたリズムを使用していること。八分音符は拍の裏で打鍵するため、左手の伴奏部の縦の流れと揃わない。そのため、音符の長さや拍感を感じるのが難しくなると考えられる。しかし、子供の歌や律動のための音楽には、付点のリズムは多く取り入れられており、保育者は習得する必要がある。付点のリズムによって音楽が生き生きとし、躍動的になるため、幼児の主体的な表現を引き出すためには不可欠であると言える。

4．グレードD

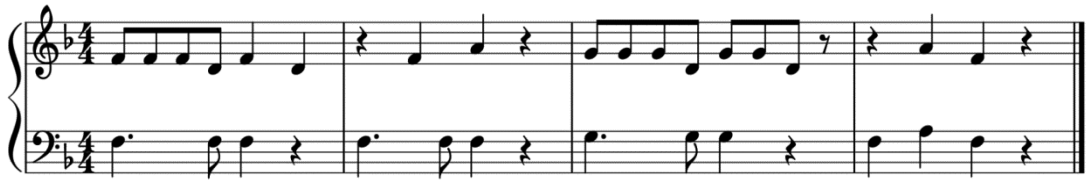
①



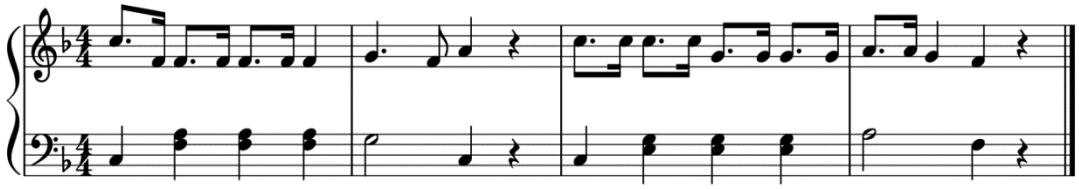
②



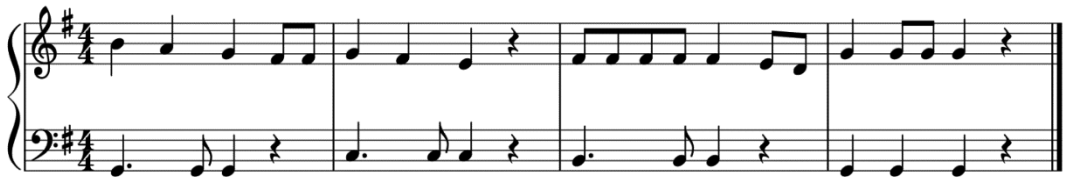
③



④



⑤

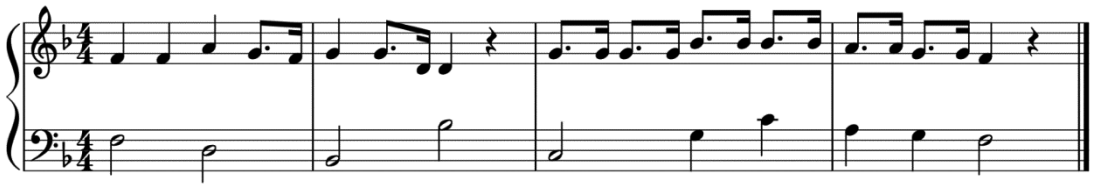


グレードDでは、調号がないハ長調は問題に採用しなかった。D①～④はヘ長調、D⑤はト長調である。D③は全体を通じて一番低い得点となった。その理由として2点挙げられる。ひとつ目は、左手の伴奏部に付点のリズムを用いたことで、音楽の縦の流れが認知しにくくなったことである。2つ目は、D③の2小節と4小節目に4分休符があることにより、旋律の流れとイメージがつかみにくかったことである。

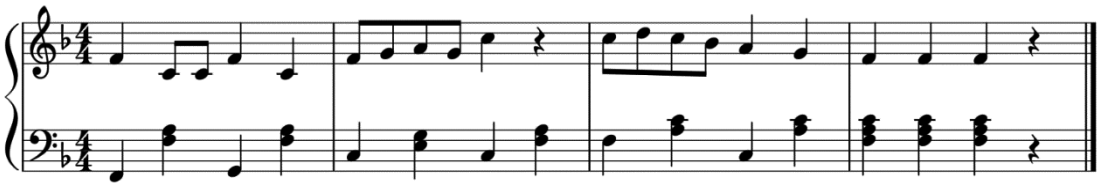
また、D②・④も得点が3点台と低かったが、これは右手の旋律に付点八分音符と十六分音符を組み合わせたスキップのリズムを用いたことで初見での演奏が難しくなったと考える。付点のリズムが連続することにより、拍感が失われ、スムーズに演奏できない。

5．グレードＥ

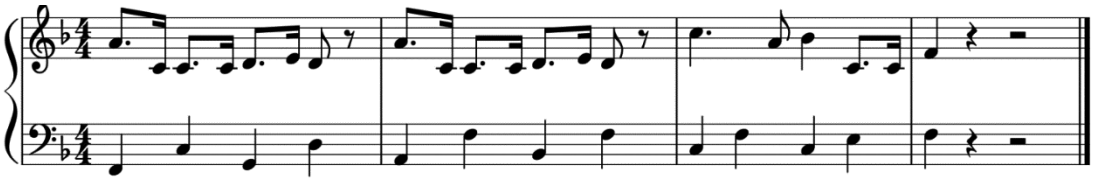
①



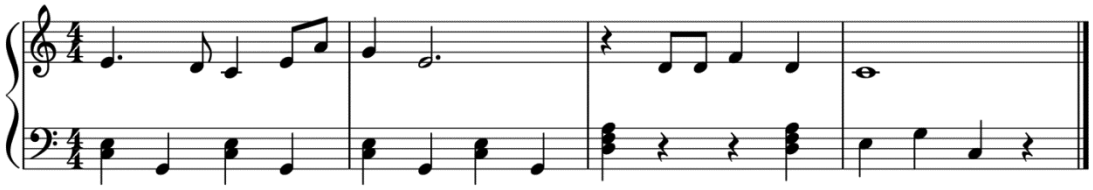
②



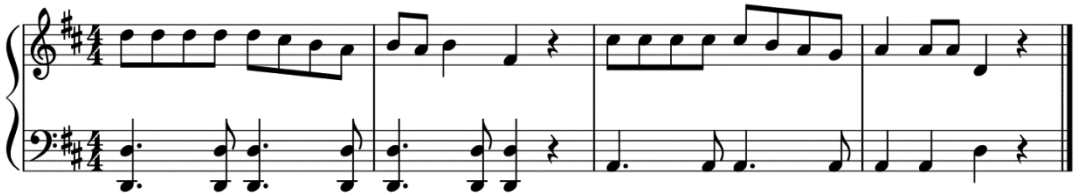
③



④



⑤



グレードＥにおいては、様々な伴奏形を用いた。①～⑤の伴奏形の特徴は、以下の通りである。

・Ｅ①単旋律で幅の広い跳躍があること。

・Ｅ②分散和音で、１オクターブ以上の跳躍があること。

・Ｅ③通奏低音のような動きがあること。

・Ｅ④重音が強拍にある分散和音で、３小節目には休符がある。
　強拍と弱拍をしっかりと理解する必要がある。

・Ｅ⑤オクターブで付点のリズムを刻んでいる。ニ長調の根音から曲が始まっていること。

グレードＥの中で一番得点が低かったのはＥ③であるが、右手の旋律が付点のリズムの連続であること、左手は連続性がないことから初見での演奏が難しかったと考察する。

（4）初見視奏から見えてきたもの

初見視奏の実施により、学生が得意または苦手とするリズムと音楽の特徴が見えてきた。

1．得意とするリズムと音楽の特徴

- 四分の四拍子で四分音符が連続する左手伴奏部
- Ⅰ、Ⅳ、V_7の和音を用いた伴奏形
- 手のポジションを移動せずに弾ける右手の旋律

2．苦手とするリズムと音楽の特徴

- 付点四分音符と付点十六分音符の組み合わせ
- 付点八分音符と付点十六分音符の組み合わせ（スキップのリズム）
- 弱拍での休符
- 連続性のない左手伴奏部
- 跳躍音程

まとめ

本稿では、幼児の音楽表現に必要なリズムや演奏技法について述べているが、初見視奏により、それらに学生が難しさを感じていることが明らかになった。特に付点のリズムは多くの学生がスムーズに演奏することができない。幼児の個々の自由な発想を受容し、主体的な表現を引き出すためには、保育者が様々なリズムの種類の面白さや特性を理解し、活動に応じた環境を整える必要がある。本稿で明らかになった課題を踏まえ、様々なリズムの習得方法を探究し、豊かな感性を育てる音楽表現活動につなげたい。

参考文献

文部科学省　幼稚園教育要領（平成29年３月告示）
全音楽譜出版社　保育のためのマーチ・スキップ・ギャロップ・ワルツ・リズム曲集　茂田すすむ編著（1969年12月）
全音楽譜出版者　21世紀に翔く子どものうた百科　飯田秀一・武田道子編集（1991年）
一藝社　新・保育内容シリーズ５　音楽表現　三森佳子編著（2010年４月）